とある銀河の理力使い（ジェダイナイト）

諏訪っと

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある銀河の理力使い（ジェダイナイト）

【Ｎコード】
Ｎ６３１４Ｋ

【作者名】
諏訪っと

【あらすじ】
とある魔術の禁書目録×スターウォーズです。
とある銀河に現れた異世界への扉。
真相を突き止めるためジェダイ達は学園都市に降り立った。
科学と魔術とフォースが交差する時、物語は始まる・・・
時間軸はスターウォーズ?～?、とある魔術ＳＳ～１４あたりです。
両サイドにオリキャラがいます。
書くのは初になりますので駄文かもしれません。
感想、評価など待ってます。

どんな辛口評価でも一向に構いません。

登場人物紹介（前書き）

ネタバレにならない程度の人物紹介です。

主にオリキャラ、ＳＷキャラを中心に書いていきます。

随時更新中

登場人物紹介

銀河サイドの人物

ウーシュ・ラドミス（男）

オリキャラ。オビ＝ワンのパダワン。本作の主人公？

外見はパッとしない。髪は短くてクシャクシャ、目は黒。

アソーカより年上であり、よく面倒をみている。

オビ＝ワンは2番目のマスターであり1番目のマスターはクローン戦争で戦死している。

アソーカ・タノ（女）

アナキンのパダワン。トグルータと呼ばれる種族。

短期で無鉄砲。よくアナキンやウーシュになだめられる。

映画クローン・ウォーズで初登場。

プロローグ（前書き）

初めまして、諏訪っとです。

小説を書くのは初めてになりますが感想、ご意見などいただけると嬉しいです。

プロローグ

遠い昔、遥か彼方の銀河系で・・・

クローン戦争が始まってから2年後

戦争は長期化し共和国も分離主義同盟も疲弊しきっていた。

そんな中、共和国の情報部は異世界への門を発見した。

その異世界には地球と呼ばれる謎の惑星が存在した。

地球には超能力や魔術などの不思議な世界が広がっている。

原因を究明するためジェダイ評議会は日本の学園都市に

４人のジェダイを派遣することを決定した。

科学と魔術とフォースが交差する時、物語は始まる・・・

プロローグ（後書き）

あの黄色い流れていく奴を想像してください（笑）

パダワン達とシスター（前書き）

つかれた。頑張ろう。

パダワン達とシスター

「遅いな・・・」
僕の名前はウーシュ・ラドミス、ジェダイの騎士だ。と言ってもまだ見習(パダワン)いなんだけどね。
「そうね。マスター達、もう帰ってきてもいい頃なのに」
そういったのはアソーカ・タノ。彼女もまたジェダイの騎士の一人だ。
「まあ、僕たちのマスターのことだから心配することないでしょ」
「それにしても、人いないね」
僕たちは今、学園都市にいる。なんでも８割が学生っていうとんでも都市だ。そして今は昼間、皆さん学校に行ってらっしゃるのか一通りが極端に少ないのだ。
「むしろよかったかも」
「なんで？」
「この地球って言う星は１００％人間だけの星だぞ。多分アソーカみたいなのを見たらびっくりして倒れるな」
何故ならアソーカは人間ではない、トグルータという種族だからだ。鮮やかな赤い肌に白い模様が付いている、極めつけは上下に伸びた角だ。
「化物、妖怪、怪物、魔物、悪魔、怪異、お化け、魑魅魍魎、どう見られてもおかしくないな」
「それ、私を馬鹿にしてるでしょ」
そんな感じでギャーギャー言いながら街を歩いていたのだった。
すると突然、人が倒れているのが見えた。
「おっ、あんなところに可愛い少女が」
「どうしたんだろう」
その派手な白い服を着た銀髪の少女に近づく。すると彼女はこう言ったのであった。

「――――――おなかへった」

その少し後、ファミレスにて。
「このハンバーグおいバクッしいんだよ」
「食べながら話すな」
それにしてもよく食べる。食べる食べる。ちなみにこの食いしん坊キャラの少女はインデックスというらしい。
「それにしてもこの街はほんとに迷路みたいかも。りょうがどっちにあったかもわかんないんだよ」
どうやら迷子か。
「ウーシュ、助けてあげよう」
「ふーん、うーしゅっていうんだ」
「いや、もしも危険に巻き込んだら大変だ」
「でも困ってるでしょう。困っている人を助けるのはジェダイの役目でしょ」
う～んと、クシャクシャの頭をかく僕。
「しょうがねえ、探すか」
マスターには後で連絡を入れておこう。
「あっ、そろそろがっこうが終わる時間かも。じゃあとうまを探そうよ。うん、それがいいんだよ」
「はぁ～、嫌な予感がしてきた」
そんなこんなでそのとうまという人物を探すことになったのであった。

「ところで、うーしゅの隣にいる人はものすごい格好をしているかも」

襲撃

「それでね、とうまはすぐにどっかにふらふら行っちゃうんだよ」
どうやら、上条当麻という人物は相当もてるらしい。と思いながらウーシュはインデックスと近くの駅を歩いていた。ちなみにアソーカ目立つので待ってもらうことにした。それにしたって柔道服のような服にローブを着たウーシュと純白の修道服のインデックスが周囲から浮いているのは一目瞭然だ。
「さてさて、どこから探せばよいのやら」
人探しを手伝うと入ったもののウーシュもこの街は全然詳しくない。

そうだ、一応マスターに連絡しておこう。
「インデックス少し待ってくれ」
「わかった」

少しインデックスから距離を置いてコムリンク（無線機のようなもの）のスイッチを入れる。
「あー、マスター・ケノービ？」
「ウーシュ、なんだ」
「えーと、どうでした学園都市総括理事長との交渉ははかどりましたか？」
「全然駄目だ。一刻も早く部外者に出て行ってもらいたいらしい。私たち他の世界から来たものがこちら世界の話をねじ曲げるの怖がっているようだった」
「そうですか・・・でどうします？出ていきますか？」
「しかしそうもいかない。異世界への扉は閉じなければならない。今からそっちに――――」
オビ＝ワンの話が急に途切れた。続いて爆発音が聞こえる。
「どうしました？」

返事はない。しょうがない、心配だが後でかけ直すとでもしよう。
そしてウーシュがインデックスのほうを振り向いた。

そこにはバトルドロイドがいた。
「え？なんですかこれ？」
気がつくと周りに人は誰もいない。さっきから少しづつ一通りは少しづつ賑わってきたとこだったのに。
「この魔術、人払いと言うんですよ」
バトルドロイドの横から人が出てきた細長い男がいった。
「魔術？そういやそんな報告を受けていたような」
「あら。知っているんですか」
「原理はさっぱりわかんないが、何が目的だ」
「ほんの挨拶ですよ」
「挨拶？」
「いやー本当ですよ。ああ、後インデックスはこちらで預からせてもらいますよ」
「はぁ？なぜ？」
インデックスをさらう意味がわからない。まさか人質に使うわけでもあるまいし。
「あら。彼女がなんなのか知らないんですか。でも説明はめんどいのでやめておきましょう」
状況がつかめないほど困ることはない。しかし、フォースがある程度の情報をくれる。例えばこいつは悪意に満ちていることとか、嘘をついてはいないことだ。
「で、これからどうする？」
「こうします」
即座にそう言った魔術師らしい男は火の玉をこちらに撃ち出してきた。
「わお」
突然の攻撃をかわすウーシュ。その先に男は逃げ出した。バトルド

ロイドもこっちに撃ってくる。それをあっさりかわし、跳ね返し、切り倒す。すぐに片付いた。
「おいおい一人にすんなよ」
「大丈夫です。術は解いといてあげますよ」
そんなことを言いながらどっかにいってしまった。
「どうすっかなー」

徐々に人が見え始めたころ、そこに体格のいい神父さんが来た。
「えーと、どなた？」
「うん？僕はステイル＝マグヌス、魔術師さ」
「それではステイルさん、説明をお願いします」

インデックス救出作戦その１

ウーシュは突然現れたステイルと名乗る少年?！とインデックスを助けるため共同前線を張ることになった。

そしてまずはダッシュで上条当麻の所へ向かっていた。

「さっき行ったことを確認するけど、インデックスは１０万３０００冊の魔術書っていう重要なものだかをも持っているから狙われてたんだな」

「そうだ・・・いたぞ」

ステイルが前方を指差した。そこにはツンツン頭の少年と中学生くらいの女の子が言い合いながら歩いていた。

「仕事だ。来い」

ステイルは上条と思と思わしき人物を引っ張っていく。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

そんな声が後ろの中学生が言うがステイルは無視する。

少し離れたところでウーシュはあることに気がついた。

（この少年、フォースの中に存在していない？）

フォースとは万物の中にあるものだ。ただし極稀にマインドトリックが聞かない種族もいる。まあ、彼の祖先がナメクジだったりする可能性はないだろう。

「お、おいステイルどうしたんだよ」

「インデックスがさらわれた」

「え・・・」

驚いた上条が急に真剣な顔になる。

「説明している暇はない、行くぞ」

「ステイル！」

上条が急ぐステイルを止めた。

「待てよ。説明しろ」

「時間がない」

「いや、こっちが説明しなければないこともあるっぽい」

「・・・くそ、実は僕もよくわかってないんだ。わかっているのはインデックスを誘拐したのが魔術結社『夢の探求者』ということで、そいつが学園都市ではない異世界から来た組織と手を組んでいるらしい」

「異世界だぁ？何が何だかワケわかんねーよ」

「僕はその異世界から来た住人だ。なぜ、世界が繋がったのかは調査中。たぶんあんたがいってる組織は分離主義同盟だろう。僕たちと戦争している奴らだ。なぜ、奴らがここに居るかも不明だ」

だあぁぁぁぁあと頭を抱える上条当麻。

「まあいい、やることは決まってんだ。インデックスを助けるってことだろ」

「その通りだ。異世界人だろうがなんだろうが焼き尽くしてやる」

「よし、多分奴らはドロイドっていうロボット軍団が一緒だ。３人じゃきついだろう。援軍を頼んでみる」

ウーシュはアソーカと通信するためコムリンクのスイッチを入れた。

「よう、アソーカ。マスター達と合流できた？」

「それがまずいことなってるらしいの。マスターは学園都市の秘密部隊と戦闘を繰り広げているみたい」

「その場所はわかるか？」

「さっきレックスに聞いた。どうかしたの？」

「ちょっと複雑な事になってね。でも大丈夫、いい作戦を思いつい

た」

インデックス救出作戦その２　アイテムｖｓジェダイ（前書き）

スターウォーズ勢と禁書勢の力関係ですがやはりジェダイは超能力者や魔術師の中でもかなり強い方に入るでしょう。　なんたって『念動力』と『予知能力』と『治癒能力』と『読心能力』と『精神感応』（テレパシー）等々、シスであれば『電撃使い』でさえ使える超多重スキルですから。

インデックス救出作戦その２　アイテムｖｓジェダイ

学園都市の奥深く・・・そこに３人の少女がいた。

「思っていたより、超手ごわいですね」

ワンピースを来た中学生くらいの女の子が言った。

「結局、奴らは何者なんでしょうか」

「ただのコスプレ集団ではないようね」

彼女たちは『アイテム』――――学園都市の裏組織の１つ――――のメンバーである。

本当は４人であったりするのだがそのうちの１人は一般人相手には意味をなさないので留守番をしている。

「結局、日が暮れ始めちゃったね」

彼女たちは昼過ぎに上のものたちからの指令を受け、標的を殺すため追っていたであった。

「浜面を呼びましょうか」

「いいえ、その必要はなさそう」

リーダーである麦野沈利が言った瞬間、レーザー光線のようなものが飛んできた。

それはメンバーの絹旗最愛の顔に直撃した。

「うう、超痛いです。ＳＦチックな攻撃はただの銃よりか威力が高いのですかね」

絹旗は痛そうに言うが、傷一つない姿は全く痛そうに見えない。

もうその時には麦野ともう一人のメンバーであるフレンダは安全なところへ隠れていた。

「糞！やっぱり効かねえ！どうなってやがる！」

「よし、引くぞ！」

そんな声が聞こえる。敵は9人、命令しているのは光る剣を持った男だ。

「超ウザイです。超死んでください」

こちらは拳銃で打ち返す。が、相手には当たらない。よく見ると、着弾前に減速し落ちてしまっている。

「これでも喰らえ！」

そう、言った麦野が敵のボスを狙って『原子崩し』のビームを放つ。しかし既の所でかわされてしまう。

その頃には兵隊たちは隠れてしまっていた。

「結局、また追いかけることになった訳ですが」

「超罠くさいんですが、どうしましょう」

「ちくしょおぉぉぉおおおおお、ナメやがって罠だろうがなんだろうがまとめてぶっ殺す！！」

麦野が切れ始めた。絹旗はこういう時のリーダーには逆らわない方がいいと知っている。

「そうですか。超嫌な予感がします」

「念のため、敵の逃走経路を計算して爆弾を仕掛けておきましたので大丈夫でしょう」

「ふふ、じゃあ浜面よんで先回りしましょう」

オビ＝ワンとアナキンは昼からずっと逃げていた。アソーカから聞いた作戦を実行するために。

「正直、こんな小細工成功するとは思えません」

アソーカから聞いた作戦はこうだ。

まずウーシュが分離主義者達の隠れ家を見つける。これはフォースを使えば簡単だろう。

次に僕たちが戦っている謎の敵を誘導し、分離主義者と戦わせる。

そのうちに、ウーシュら別働隊が人質を救出するそうだ。

「私もそう思うよ、アナキン」

「では、なぜ逃げるんですか。残って戦っても十分戦える戦力です」

「いいや、確かにそう見える。しかし感じるのだ、彼女たちは強い。正面からぶつかったら、損害は様相以上の規模になるだろう」

アナキンはまだまだ未熟だと、オビ＝ワンは思う。

「あんな少女たちがそんなに強いとは思えません」

「見かけに騙されてはいけない」

ヨーダやドゥークーがそのいい例だ。彼らはフォースを使い自分を強化するのがうまい。

「でも、彼女たちはフォースを使いません。超能力なんてフォースの敵ではありません。それに今こうして話していられる余裕があるのも彼女たちが弱い証拠ですよ」

「いや、そうではなく・・・まずい！！」

「確かに、そうですね！」

爆弾が仕掛けられてある。そう感じた、オビ＝ワンとアナキンはクローンを前に飛ばした。

その瞬間、すぐ側で爆弾が爆発した。

「結局、2人しか殺せませんでした」

「リーダーを殺ったんです。超十分ですよ」

「死ね死ね死ねェェエエエ」

麦野のビームがはなたれ、一人のクローンが真っ二つになった。

そして、3人それぞれが虐殺を開始する。

クローンの手足が引き裂かれ、爆発で吹き飛んでいく。

「体制を立て直せ！」

コマンダー・コーディが命令する。

麦野はコーディに狙いを定めた。

そして、いままさに放たれようというとき、麦野の体にアナキンの蹴りが入った。

ごぶぅと、麦野がひるむ。

「ま、まだ生きてやがったか」

「僕をなめてもらっては困るな」

アナキンとオビ＝ワンはとっさにフォースの壁を作り爆発を防ぎきったのだった。

「アナキンこっちだ！」

フレンダをフォースで吹き飛ばしたオビ＝ワンが撤退を開始する。

クローン兵やアナキンもそれに続く。

「糞糞糞おおぉぉぉぉぉおおおおおおお！！1億と2千回ぶっ殺す！！」

麦野は気絶したフレンダの首をつかんで引きずりながら追いかける。

「ちょ、超待ってください！」

絹旗がその後ろを追う。

麦野がオビ＝ワンの逃げた道を進むと角があった。行くとなるとそっちしかない。

麦野は角を曲がる。

「あぁん？どこいきやがったあの野郎」

そこには誰もいなかった。

インデックス救出作戦その２　アイテムｖｓジェダイ（後書き）

春休みが終わってしまったのでこれからは更新が遅くなるかもしれません。

ご迷惑をかけてしまって本当に申し訳ございません。

インデックス救出作戦その３　グリーバス将軍（前書き）

遅いかつ短くてすいません。今回は戦闘前の準備回です。魔術師のオリキャラが多数出ます。迷ったのがグリーバス将軍の一人称。『俺』でよかったっけ？間違っていたらすいません。

インデックス救出作戦その3　グリーバス将軍

『アイテム』がジェダイたちを捜索しているその近くにある廃墟の2階で、グリーバス将軍は魔術結社『夢の探求者』の一団と会議をしていた。

会議にはグリーバス将軍のほかに4名の魔術師が参加している。

そのうち1人は魔術によって現れた立体映像で、その姿がたまにちらちらゆれている。

「情報を報告しろ！さっさとせんか！」

グリーバスがそばにいるドロイドを破壊した。これで3体目である。

「まあまあ将軍、もう少しの辛抱ですよ」

グリーバスの右手に座っている男が言った。

背が高く細長い体づきである。

「ジェイコブ、貴様が遅いからそうなったのではないか。おかげで異世界の門は共和国に封鎖されてしまったぞ」

「はっ、だからー先から言ってんだろー。異世界の門は一つだけじゃねーってさ」

今度は左手にいる奴が言った。

名前はキース、緑色をした服を着ている、変わり者の餓鬼である。

「異世界の門は必ずまたどこかへ現れるんだから、それまでっゆっくりしてよーぜ」

「この場所が見つかる可能性も大丈夫ですよ。魔術で探知されないようになってますから」

「いや、ジェダイは必ずここにやってくる。2年も奴らと戦争している俺が言うのだから間違いない」

そこで、もう立体映像の男が言った。

「約束は守るんじゃろうな、将軍」

「グハハハハ、大丈夫だ。シディアス卿は自分の益になる約束は守る」

と、グリーバスは言いながら立体映像のほうへ歩く。

「貴様こそあの餓鬼をこちらに引き渡してくれるのだろうな」

「もちろんじゃ」

立体映像が消えた。それがあった場所には何も残っていない。

「あのー将軍？偵察ドロイドからの連絡がさっきから途絶えてるんですか」

「グオオォォォォオオ？！」

ドロイドの顔が吹っ飛んだ。

「見つかりましたか。早かったですね」

「グハハ、ジェダイの相手はわたしとドロイド軍がしよう」

「ちょっと待て、あんたが行っちまうのかよ」

「私がいってきましょう。そのほうがいろいろ便利でしょう」

「貴様のような奴にはジェダイは倒せんわ」

「ジェダイだかなんだか知らないが私の敵ではありませんよ。あなたこそ残るべきでしょう」

グリーバスがジェイコブの側によってきた。

「俺の命令が聞けんのか？」

グリーバスとジェイコブの距離は数センチもない。

「いつから、あなたは指揮官になったんですか？あなたと私は協力関係であって命令できる立場にありませ――――――」

その瞬間ジェイコブの体をライトセーバーが貫いた。

「――――ぐがぁぁ――」

セーバーが消え、ジェイコブの体が床に倒れる。

「他に文句がある奴はいるか？」

キースは体に寒気を感じた。直感がこいつには勝てないといっている。

「い、いえ」

「では、キースとシェムは他の魔術師とここを守れ。私はジェダイ狩りといこう」

「へっへへ、任せろ」

「・・・了解」

グリーバスは笑いながら外へ向かった。

ウーシュらは少し離れた建物から身を隠すようにしてビルの様子を見ていた。

「おい、まだかかるのかよ。インデックスが心配だ」

「落ち着いてください。始める前に良い知らせと悪い知らせがあります」

と、ウーシュは言って

「良い知らせはドロイドの数が見るからに減ってますね。これなら

突入出来そうです」
「悪い知らせは私たちのマスターのグループが思いのほかダメージを受けて、援軍にこれないって」
最後にアソーカそう締めくくった。
「うーん、すまない。ここにいる人達で目的を達成するしかなさそうだ」
「わかった。もう待てねえ、早くインデックスを助けよう」
「インデックスの場所がわかった」
と、ステイルが言った。
「あのビルの地下にいる」
「よし。レックス、ブラスターをスタンモードにしておけ」
「いいんですか？」
「ああ、できるだけ殺したくはない。」
「イェッサー」
「お先に行かせてもらうわ」
「おい！待て！」

アソーカがビルから飛び降りた。

「僕たちも急ぎましょう」

ウーシュはため息をつきながらそう言った。

麦野沈利はまた違う廃ビルを捜索していた。

（まあ、ビルごと潰しっちゃってもいいんだが、それじゃあつまんねえしなぁ）

このビルは麦野達がジェダイを見失った場所の近くにあったビルの1つである。

逃げ場所はここぐらいしかないと踏んだ麦野は絹旗には別のビルを探させ、自分はこのビルを探しているのだ。

ちなみにフレンダは当分起きそうもなかったので先に帰してある。

「いたいた。鬼ごっこはもうお終い？」

2階で麦野は2人のリーダーだろう男に出会った。

「こっから先にはいかせない」

若い方の男が光の剣を取り出す。

「兵隊さんを庇っているの？優しいのね」

と、麦野は言って

「アハハハっ、いいわみんなぶち殺してあ・げ・る♪」

インデックス救出作戦その３　グリーバス将軍（後書き）

次回、超バトル回です。お楽しみに

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6314k/

とある銀河の理力使い（ジェダイナイト）

2010年10月21日21時14分発行